

## 対照表形式の近世後期上方語彙資料

村上 謙

## 一 はじめに

近世後期という時代は全国的に言葉に対する関心の高まった時期であった。例えば、全国各地の方言を収集した『物類称呼』（安永四）や『俚言集覧』（寛政九頃）などが編纂されたことはその好例であるが、この背景には、幕藩体制下における政治的安定およびそれによる各地域間の人的、物的、文化的交流の存在があった。

ところで、日本語史学の入門書や概説書などにおいて、近世後期の上方語という点、方言対照表とでも言うべき『浪花聞書』（文政二）や『新撰大阪詞大全』（天保十二）、また、『浮世風呂』（文化六）での上方者と江戸者の方言会話部分、が取り上げられることが多いように思う<sup>1</sup>。確かに、これらの資料は面白いし、使いやすい。しかしその一方で、これらに類する資料が他に多く残っていることはあまり知られていないようである。また、そうした資料情報の共有が行われていないことに対しても

筆者は強い危機感を覚える。後期上方語資料を紹介したものとしては夙に島田勇雄（一九五九）、前田勇（一九五七）などがあり、長らく大きな指標とされてきたが、いずれも公表から半世紀が経過し、その補填を行う必要もある。そこで今回はその取り組みの一環として、『浪花聞書』などに代わる対照表形式の近世後期上方語彙資料を、先学の挙げたものとの重複をなるべく避けつつ、いくつか紹介し、参考に供したい。

## 二 上方出身者による随筆類

まず、上方出身者の手になる随筆類には、対照表形式で語彙資料となるものが多く残されている。それらの場合、他地域方言との比較よりもむしろ、上方内での珍しい言い方、例えば「さんしよう」や「せんぼう」、「符帳」などと呼ばれる特殊社会語彙を選んで説明したものが多く<sup>2</sup>。これは当時、職業の細分化や固定化の進行に応じて様々な特殊社会語彙が形成されたこと

による。そして、当時の人々もそうした各種の特殊社会語彙に  
対し、無関心ではいらなかったであろう。以下、いくつか  
挙げる。

宝暦頃の大坂の巷談を集めた『宝暦雑録』（成立年不明、宝  
暦頃か）には「さんしよう」を集めた箇所がある。

近年盗賊乞食などのいふ、さんしようといふかくしことばあ  
り。常の人のしらぬやうに拵へたるものか。さんしようとは、  
あぢはへばからみ知るなれど、うちみるには味の知れぬとい  
ふ縁にや。其詞などゆめ／＼いふべからず。能知れる人にと  
ひて爰に記す。笑ひの種なり。

女を	げんさい	男を	ひで
女子を	げんがり	男子を	がりぼし
ばゞを	ひんこだら	ぢいを	ひわん
医師を	ほこり	坊主を	ゆるみ
土を	おかり	腰元を	ひがもと
食焚下女を	ゑとり	うばを	ちゞぶ

(中略)

など、万の事に此詞あるよし。をかしくも又下鄙たる事也。  
必ずたわむれにもかやうの詞いふべからず。

(テキストは上方藝文叢刊による)

本書には「せんぼう」についての記述もあつて貴重である。

此外に芝居を業にする者共に、せんぼうといふことば有よし。  
是も数多くさま／＼成べし。乗物をひきどうぐ、医師をりや  
うでんといふの類也。出家にもせんぼうといふ詞有よし。肴

やをゑりや、たいをほうぜんぼう、蛸をはしずめ、はもをし  
ゆきん、いゝだこをめしこざう、鯉節をふんべつ、ぼらをた  
つがしら、いかをめうばちといふ類ならん。其外いやしき者  
共の貧しき暮しの内より、おもはずいひ出したることば有る  
ものなり。ゑらい、どたま、がき、けたいくそ、(中略)の類、  
つねにたしなみて、いわぬやうに心得べき事也。

『浪花見聞雑話』（成立年不明）は宝暦頃から文化頃までの大  
坂における巷談を集めたものであるが、その中に「せんぼう」  
を取り上げた部分がある。これによると、「せんぼう」は特殊  
社会内だけでなく一般社会にも流入していたことが知られる。

せんほ

安永より天明にいたりて、町々にせんほを用扱。多くは芝居  
懸りたいこ持茶屋亭主其余町々にて是を遣ふ。其荒増を爰に  
しるす。

貴様を	どうじく、	さかなを	たつほ、	
錢を	しんた	又とろう、	家を	ぜめ、
たこ	しのき	たつほ、	汁を	じんだい、
女房を	わこと、	顔を	おかのしろ、	
みそ	三年、	後家を	ちやうけい、	
げいこを	ころけ、	火を	にち、	

(中略)

其余数多有といへど、一々書にいとまあらずに寄略す。

(テキストは随筆百花苑による)

また、流行語について箇条書きにし、それぞれの流行時期を記

した部分もある。

当時はやり詞

- 一 声じや 安永
- 一 何ぞいふてか 安永
- 一 からけつ 寛政
- 一 ひつてん 天明
- 一 てんこつ 明和
- 一 はら 寛政
- 一 すか 天明
- 一 さんだん 寛政
- 一 妙じや 天明
- 一 ほんくする 文化
- 一 性根 明和
- 一 ちは 文化

(以下略)

語義などの説明がないので、どういった用法であったかはわからないものの、どのような語彙がいつ頃に流行したかを知ることがができる。そもそも流行語とは瞬間的かつ爆発的影響力の強い語彙領域であるが、それも、近世における情報メディアの多様化と情報伝達の大量化、高速化があつてはじめて存在しうるものであつた。そして、当時の人々もそれまでの言葉の流れとは異なるスピード感を楽しんだのであろうと想像される。流行語に関するこうした記述が近世後期に見られることはそうした意味でも重要である。

『撰陽落穂集』(文化五)は大坂の狂言作者浜松歌国による随筆であるが<sup>3</sup>、そこには様々な業種における「符帳」についてまとまって説明がある。一例を示す。

○大坂市語の事

大坂の市中商家に符帳といへるは、その家々にあれ共、皆隠語なれば白地にしるさず、只通り符帳といひて、其仲間々々に分れり、あらましを爰にあらはす、

ざこばの符帳は、

- 一 よそと
- 二 ふり
- 三 きり
- 四 みす
- 五 がれん、
- 六 かん
- 七 さい
- 八 ばん
- 九 け
- そく もいふ
- てん とも
- ちから とも
- たり とも
- 御手 いかりとも
- かい じ
- たまや なん
- うた どう
- きは が

魚商人のこと葉に、能魚をうつくしきといひ、古きうををめんどひといふ、又一夜越たる魚をまりといへるは、一夜泊りしといふべきを略して、まりといひならわせしが、何の比やりかやなぎと呼り、これはまりより出てやなぎ成べし、

(テキストは新燕石十種による)

ここにあげたものは雑喉場<sup>4</sup>の符帳であるが、これ以外にも「天満の側青もの市」、「道修町葉種屋」、「瀬戸もの屋」、「木綿屋」、「呉服物商人」の符帳についても記述がある。また「隠語」についても、

同じく隠語のあらまし、

酒を、水かねといふ、  
飯を、白ともヨクイニシともいふ、  
うなぎを、五八霜、  
泥亀を、べつかう、

などが挙がっている。本書の続編である『筆拍子』（成立年不明、文化頃か）にも「商人符帳の事」という章段があり、そこでは「商人の符帳は、前篇に大体を出すといへども、洩たるをわづかに爰に記す」として「大坂梶木町辺小間物商人の符帳」、「備後鞆、福山、尾道辺」の荒物屋の符帳、「紙屋符帳」、「煙草屋符帳」、「唐人符帳」を挙げている。しかし何より圧巻なのは「米相場通言の事」という章段である。そこには約八十語もの米相場の隠語について記述がある。その一斑を記しておく。

米相場は、多さか表の権輿にして、さまかゝの通言あつて、此道を好める人は、よく知りたることなれども、又他国の人  
の便にもやと、爰に記す、

○米といふは、たゞ帳合商ひをいふ、○小相こせとは、一夜切の商ひ銭立なり、大引前より出て、翌朝の取引と成、別に小相株あり、○虎市、廿石立の商ひ、米相庭の左に寄、

（テキストは新燕石十種による）

これまでに挙げた資料はその多くが特殊社会語彙を興味の対象としたものであったが、一般社会の語彙について対照したものもある。例えば、様々な見立番付の類を集めた『浪花みやげ』（天保頃刊）の中に、大坂と江戸の言葉約八十語について対照した「大阪江戸風流ことば合せ」という章がある。

大阪 風流ふうりゆうことば合せ  
江戸

大坂にて

ぬくいといふことを

物かふてくる

江戸にて

ぬくといふ

かつてくる

物かつてくる

こわい事

そふじやけれど

こゝへおこしや

お家さま

かりてくる

おつかない

そふだつて

こつちへくんねへ

おかみさん

（テキストは国会図書館蔵本による）

これなどはまさしく『浪花聞書』や『新撰大阪詞大全』に代わる語彙資料として参照されるべきであろう。なお、管見の及んだ『浪花みやげ』の諸本はいずれも包背装（糊装）で、丁付けの類は一切なく、丁数、丁の順序も一定しない。また、収録内容は基本的には各種の見立番付であるが、なかには『しんぱん一口ばなし』や『顔づくし落ばなし』などを収めるものもあり、作者もまちまちであるところからすると、本書は戯作類や一枚刷の刷物の寄せ集めと見るべきであろう<sup>5</sup>。

それから、大坂案内記とでも言うべきものに『繁花風土記』（文化十一）がある<sup>6</sup>。この書は様々な大坂の事柄について記したものであるが、その記述は実に精細で、語彙関係に限っても見るべきものが多い。例えば「浜方手引草」や「米方通言」と題する章には米相場の通言が、また「雑喉場銭」の章には雑喉場の符帳が記載されており、いずれも先の『撰陽落穂集』や『筆拍子』等と比較することが出来る点、貴重である。また「今世はやる詞遣ひ」「学者ふつて誠は粹かる詞」「悪鬼めかして粹がる詞」とする章には当時の流行語が数多く記されている。

ありかたゐ 上代よりのことばなれども今はめつたにつかふ詞となりては上々より下のものへ対して云ふうるたへもの有  
とかなんとか 此ことばば尻に付しやれ詞也 (今世はやる詞遣ひ)  
(今世はやる詞遣ひ)

御病氣ヲ 御不例 これらは同輩の間に遣ふ詞にあらず、もし貴人にむかはざんといはん

御前ヲ ぬし (学者ふつて誠は粹かる詞)  
(悪鬼めかして粹がる詞)

ムチャヲ 南無三 (悪鬼めかして粹がる詞)  
(テキストは大坂経済史料集成による)

さらに「京大阪言葉ちがひ」という章があつて、京都と大坂の言葉づかいの相違を記している。ほんの一例を挙げる。

いつかいヲ 大きい

くすくさぬヲ おこすおこさぬ

あちないヲ もむない

あたゝかいヲ ぬくい

などである。上段が京都、下段が大坂での言葉づかいであるらしいが、両地間の言葉づかいの差を知る上で貴重である。

### 三 上方洒落本

上方洒落本にもいくつか語彙資料となるものがあるので挙げておこう。まず、『粹行弁』は「天明三ツのとし水無月 浪花山人猿笑述」の序を持つ写本で、現在、関西大学図書館蔵本が唯一知られるのみであるが、本書には「附録」として、「浪花粹言」「京都粹言」「東武通言」「中華言」などを対照形式で

説明を加える箇所がある。

世に普く粹言を称ずるもの あまね 変言 へんげん 略語 りやくご 譬諭言 なぞことば 楽屋の占傍 がく せんぼう  
さんせうなど皆混雑して粹言となれり 是を撰むに際限なし  
ことに浪花は粹言の変化もはやく三日いかねははやりものにおくれて遊びがとぼつくと外山翁 くわいざんおう のいへるも金言也 獵は鳥が教るとて遊里に通へば自然と通ずるものなれども遠土の人又は遊里に疎き人に粹書を見安からしめんとあらましを爰に出す

#### 浪花粹言

- 一 せんぼうをいふを あがくといひ
- 一 さんせうをいふを つむといふ
- 一 楼に登るとは 茶やへ行事
- 一 散財するとは かねつかふ事
- 一 粹ふるふとは 粹を行ふ事
- 一 地間とは 粹言の事
- 一 受るとは 賞美する事

#### (中略)

#### 京都粹言

京都は浪花に近しといへ共人の氣持大に違ふ事なり さりながら遊里の者と粹とのらとあほうとは浪花にかわらす 是にあてはやり言も粹言も互ニよく通して左のみかわる事なく京の粹は少しぬるき方なれとも真の粹は京に多し 土地の風にて自然とつゞまやかなる所有故也 たとへは江戸大坂にては軽口噺しも近年随分利のつまらぬをよしとすれども京は今に利くつの詰りたる所を取る也 浪花の俄にて

いはゞ新町俄にわかといふ気味合也 是によつて粹言も其好む所に相違あり

一 きつい十一とは

士じやといふ事

一 十二はだとは

八四やつしといふ事

一 じの気味とは

少し自慢といふ事

一 十八日とは

こるといふ事

(中略)

東武通言

近年京大坂の粹がり江戸言葉を兼用けんようすといへとも多くは邪粹にてあやまり少からず 幸なるかな三都にわたるいきの大つうあり 此人に其解げを乞て改正して左に記す

一 つうとは

粹さいの事

一 大ぞうとは

家暮やぼの事

一 いき

風雅ふうが

一 おつな事とは

よい事

一 きやん

浮ワ氣

(中略)

中華言からことば

スウクワン 侍

キヤイシヤン

丁人

シヤンジン 商人

コンプウ

職人

コシユ 医者

ノウプウ

百性

(中略)

ひとゝせみちのくのしのぶの郡に遊びしに其所の言葉耳にとゞまり実ニ古風ニひなびて殊勝なる亦はおかしき事も有ゆへに少しく爰に顕はす

ゴセガヤケル 腹が立

コワイ

草臥

セナ 兄

バケル

あまゑる

モサ 申

ベロ

舌

(下略)

(テキストは洒落本大成による)

洒落本というジャンルの性格上、「粹言」「通言」といったいわゆる遊里語が中心に取り上げられているが、こうしたものが特殊社会語彙に対する興味、関心を反映したものであることは前節で見た随筆類と同じである。また、三都の比較という視点があることも見逃せないし、それらと並んで唐音や奥州言葉がいくつか挙がっている点も注目されよう。これらは十八世紀後半の上方における全国方言への関心の高まりや、上方遊里における江戸語や唐音の流行を如実に反映しているものであつて、その点からも貴重な資料である。

また、『粹行弁』の強い影響を受けた洒落本に『客野穴』(天保十一)がある。本書もやはり写本で、呵々庵乳桃なる人物の手になるものであるが、ここにも対照表が掲載されているので紹介しておこう。

△一 初心しよしんの為ために色里いろさとの賛称さんしよあらまし茲こゝに記す

一 物ものいわすを

ひつそり

一 損得そんとくの無一通りなまひしよを

せりふなし

一 思おもふ通とにいた事を

心地こゝち

一 四ヶ所しかしよを

よてん

一 くれた事を

しんき

一 なきごと云いふを

しうたん

- 一 口のわるいを かけ徳利とくり
- 一 あかん事を つめたい共 ひゑた共
- 一 づゝない事を 蟹かにこし
- 一 ひまが出たを 首くびおち
- 一 化粧けしやうするを なでる
- 一 しわい事を 木助きすけ

(テキストは洒落本大成による)

など、遊里語約七十語について記載がある。

#### 四 非上方出身者による見聞記類

上方は、政治的中心地である江戸とともに文化的、経済的階層の頂点に位置する地域であったから、当然のことながら、他地域との人的交流が盛んであった。特に、近世後期は商業活動や武士の転勤などに加えて個人旅行が盛んになる時期であり、他地域出身者の流入が一層増したことが知られる。そうした非上方出身者によつて記された上方見聞記、旅行記類には当時の上方語に関する記述が散見される。冒頭で述べた『浪花聞書』もその一つとして考えられるが、これらの場合、上方出身者の場合に見られたような特殊社会語彙に対する記述よりもむしろ一般社会の語彙、いわゆる一般的な上方語であるが、に対する記述が目立つ。これは関心の方向性の違いによるもので、非上方出身者の場合、言葉の地域差に興味の中心があったのであろう。以下、対照表形式でないものも含めて、いくつか紹介する。

明和三年春に上京した江戸の幕臣木室卯雲が、一年半の滞在をもとに記した『見た京物語』には、当時の京都の有様とともに

に様々な語彙についての記述がある。

- 天気暑寒の事、気分きぶんの事あんばいといふ。
- 鯉節こいせつの事はふしと斗いふ。
- すさまじいといふ事をひさまじいといふ。
- 茄子をなぎそうといふ。目高めたかをだんぎぼうといふ。生姜しょうがの事をはじかみといふ。
- 鳴焼なりやうの事を茄子田楽といふ。

(テキストは日本随筆大成による)

曲亭馬琴も享和二年、上方に遊んだことがあった。その際の見聞記が『羈旅漫録』である。これにも上方語に関する記述が豊富である。例えば、「祇園の方言」として

すべて女はなといふことをそへていふ。  
わしがけふな、かみあらふてな、とんとおちんさかい、いまくしうてな、(中略) 大かたかくのごとし。

江戸にてはいつこうといふことは、わるきことにのみそへていへど、京にてはよきことにもいつこうよい、いつこうゑらいといふ。(テキストは日本随筆大成による)

という。対して、「大坂妓院の方言」としては、

妓の言語は。京も大坂も大同小異なり。大坂は言語すこし京よりさつぱりとしたる方なり。なといふことゝ。いつこうといふことを京ほどいはず。

などである。また、「さかいといふ詞は、ゆゑにといふにおなじ。江戸はからといふ。」(祇園の方言) という記述が見えるが、同じく馬琴による『燕石雑志』(文化六頃)にも「江戸のからといふべきを、京より以西にしなる人はなべてさかひといふ。」とい

う記述があつて面白い。

文政十一年頃の成立と考えられる『浪花洛陽振』も江戸者による上方見聞記であるが、これには「浪花ことば」と「洛陽ことば」という章があり、大坂と京都の語彙について簡条書きで解説を加えている。「浪花ことば」の章から一例を示す。

- 一 ちいさいと云事を ちいツかいと云
- 一 何ンで△ル云事を なんでおますと云
- 一 茶をあがれと云事を ちや／＼あがりんかと云
- 一 いきなせへと云事を いきいなと云ふ 又いきんかと云ふ
- 一 酒之本なをしの事を やなぎかげと云ふ

(テキストは上方藝文叢刊による)

言うまでもないが各条の後半部分が「浪花ことば」である。また、「洛陽ことば」の章では「すべて大坂に同じ。」としつつ、「中には少々つゝ替りたる事、其荒ましを記すのみ」として、

- 一 ほんなをしの事を、 なんはん酒と云ふ
- 一 しきやきの事を、 なすびでんがくと云ふ。 すべてなすと はけつしていわず
- 一 あそこの側と云を、 あこのねきと云ふ
- 一 ふるまいの事を、 ふれまいと云ふ
- 一 口々にこゝとをぐわや／＼云ふを、 ぼくりくさると云ふ
- 一 こう云たと云ふを、 いわしやつたと云ふ。 又、云ふたと云事も随分云也。

などが挙がっている。収録語彙数が多い点、また大坂と京都の言葉づかいを比較できる点、貴重である。

江戸深川の芸人、富本繁太夫による『筆満可勢』第五巻は天

保六年正月から七年十二月に至る約二年の京阪滞在の記録であるが、機を見て敏でなくてはならぬ職業柄もあつてか、諸事にわたつて鋭い観察眼がうかがえる。そこには七十近くの語彙についての記述が見える。以下引用するが、基本的に、各条の前半に上方語を挙げ、後半でその説明をする、というかたちをとっている。

御祝儀出しを お正月共、ポチ共言。

ゴリガン。 強き勇の人をさして言。 是は纏の中に鈴有りてゴリガンと鳴る故なり。

ヲゴロモチの御祝ひと言ふて皆囃る、江戸にて言モグラモチなり。

カタが悪ひ、 仕合悪きと言事。

六尺来り、 是を足付きと言、 江戸の、ユスリなり。

山金と言は芸子杯色に成りて得心尽にて来る時は山金にて払ふ。 式玉三分の花を茶屋の口銭なしに見せ口銭と屋方斗の払

ひなり 屋方は其女の内なり 老本に付百廿七文払也。 是を山金と言。

ジワヲ言、 古障を言事。

スコヲテン／＼、 天窓をはる杯言事。

スコイ、 此人はこすい人だ杯言事。

(テキストは日本庶民生活史料集成による)

また旗本久須美祐雋が大坂町奉行として安政三年から文久三年まで在職した間に記した『浪華の風』(『在阪漫録』第四巻)にも上方語の解説がある。例えば、

当地の方言をもてよみし狂歌、 戯れに記し置。

此程の強イ敵イ暑さの疲倦也しんどさにおおかみさん也るさん達も寝る也こけて居るなり

順繰りにこけては休む其傍ねおよめきに御寮人何をなには多らい身仕舞化粧なり  
もとより也  
どだいこの暑さにまけて何せうも、よふ出来ぬなり  
面あ倒くさいぢれたい也  
心こ気きくさくて

当地にては、町屋の妻杯はおしなべておえさんと唱呼す。  
……  
(テキストは日本随筆大成による)

の如くである。対照表形式ではないものの、ルビの付された語が上方語として認識されていたということになる。この『浪華の風』ではさまざまな語に注釈が付され、特に食物に関する記述は精彩を放つ。

なお、本稿では紙幅の都合上、三馬や一九、平亭銀鶏などの非上方出身者による戯作類に触れられないが、非上方出身者などのように上方語を受け止めていたのかを知るすべとしては大きな価値を持つと言つてよい。伴中義による『烏歌話』には対照表が付されたものもある(榎垣実(一九六七))。今後の効果的な利用が期待される。

## 五 最後に

ここ数年の近世語ブームには目を見張るものがある。江戸文化歴史検定などの検定ブームとあいまって、一般向けのちよつとした解説書の類から各種の辞典まで、さまざまな形で近世語に触れる機会が増えている。研究者向けとしても、二〇〇八年、頼原退蔵の遺稿をもとに尾形仿が編纂した大著、『江戸時代語辞典』が出版されたことは記憶に新しい。しかもそれが販売堅調である、という、にわかには信じ難いニュースも入ってきた。

江戸時代の言葉を集めた『江戸時代語辞典』が大冊としては

珍しく売れ続けている。発刊から十一月で一年。心豊かな江戸の言葉が、平成の現代に静かに広がりつつある。

(二〇〇九年九月二十七日付MSN産経ニュースより)  
本稿ではそうしたブームに言わば「乗る」形で資料紹介をしたのであるが、ここで取り上げた資料はいずれもすでに翻刻されており、全く目新しいものでないことを最後に確認しておきたい。しかしながら、極めて貴重であるにもかかわらず十分に活用されているとは言いがたく、例えばその多くが先の『江戸時代語辞典』にも引かれないという現状があるのである。そういう点を鑑みても、近世語彙資料の発掘ないし再発掘の意義はまだ十分にあると考えるべきだし、本稿をものする意味もいくらかはあつたかと思うのである。

## ■引用文献

榎垣 実(一九六七)

『烏歌話』の方言対照表」(国語学六十九)

真田信治(一九九一)『標準語はいかに成立したか』

島田勇雄(一九五九)

「近世後期の上方語」(国語と国文学三十六・十)

野村剛史(二〇〇四)

「近世スタンダードの動詞アスペクト」(言語三十三・四)

前田 勇(一九五一)「京大阪言葉ちがひ」(近畿方言九)

前田 勇(一九五七)『近世上方語考』

森岡健二(一九八五)

「言文一致体成立試論」(国語と国文学六十二・五)

注

1 ただし、取り上げられることがあるとすれば、という注釈が必要である。現時点では、概説書類で後期上方語が扱われることはほとんどない。

2 前田勇編『近世上方語辞典』（「さんしょう」の項）によれば、さんしょうは「侠客・盗賊などのつかう隠語の称。これに対して操り・浄るり社会用隠語をセンボウと称したが、寛政末頃から混同されて区別がなくなり、両語とも隠語の異称となった」という。

3 歌国にはほかに『南水漫遊拾遺』があり、そこにも対照表がある。前田勇（一九五七）参照。

4 雑喉場は大阪市西区江戸堀から京町堀にあった海産物市場で、堂島の米市場、天満の青物市場とともに近世大坂における物流の中心であった。また、道修町は現在も菓業の地として有名である。

5 「大坂江戸風流ことば合せ」は牧村史陽を中心とする「大阪ことばの会」が編纂した雑誌『大阪弁』第二集（一九五二）に翻刻されている。なお、『浪花みやげ』は大阪府立中之島図書館に多数所蔵されており、今後の調査が期待される資料である。

6 これについては前田勇（一九五二）（一九五七）に紹介がある。

7 『客野穴』は現在中村幸彦旧蔵の一本が知られるのみである。

る。両書の関係については洒落本大成補巻の解題に詳しいので参照のこと。

8 「江戸者らしく少くも大坂の人ではない」（『日本古典全集』浪花聞書』解題）

9 ちなみに、対照表形式の方言語彙資料を用いて近世スタンダード（標準語）の問題を論じたものに真田信治（一九九二）がある。真田は、近世期に見られる全国各地の方言対照表数種を検討し、十八世紀半ばに江戸語と対照する資料が増える点から、その頃に近世スタンダードが上方語系から江戸語系にシフトしたと考えるのであるが、近世スタンダードを上方語、江戸語といった地域語に大きく依拠すると捉える点において森岡健二（一九八五）以前のものであり、現在の学問的水準からは採れない。なお、近世スタンダードについては野村剛史（二〇〇四）などを参照のこと。

（付記） 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（明治大正期関西弁の史的研究）（若手研究（B）平成二十一―二十三年度）による研究成果の一部を利用した。